

ブークモールにおける動詞の短縮形

久保 さやか

拙稿、研究ノート「ノルウェー語・ブークモールの単開音節動詞の分類」(1997; 68-74)において、ブークモール(以下 *bm.*)によく見られる単開音節動詞、をデンマーク語(以下 *da.*)や古ノルド語形(以下 *norr.*)と比較し、それらがどのような特徴を持つのか調べた。その結果、単開音節動詞には、大きく分けて、次の2種類が認められた:

- . デンマーク語では *-ve* (例: *bm. ha - da. have* 「持つ」) *-de* (例: *bm. be - da. bede* 「頼む」) *-gđ* (例: *bm. dra - da. drage* 「引く」) が残っているもの
- . デンマーク語においても単開音節であり、古ノルド語形では語根が母音 (例: *bm., da. bo - norr. búa* 「住む」) ないしは半母音で終わっているもの (例: *bm., da. le - norr. hlæyja* 「笑う」)

2) の語はデンマーク語だけでなくスウェーデン語(以下 *sv.*)においても同じく単開音節である(上の例ではそれぞれ *sv. bo, le*)。すなわち、1) より古い段階の発達によるもので、これらの3言語に共通している。それに対して1) は、1380年から1814年までのデンマークとの連合下で、主にデンマーク語を書き言葉として用いていたが、そこからノルウェー独自の書き言葉を創り出した結果である。つまりこの2種類の動詞は単開音節になった時期、少なくとも表記上単開音節で現れるようになった時期が異なる。特に1)の語形は一般的に「短縮形」と見な

されている。本稿ではこの1)タイプの単開音節動詞の不定詞¹に限定し、それらがなぜ、どのように生じたのか、正書法と音韻的側面から考察する。

動詞の短縮形で消える音

前研究ノートでの調査の結果、動詞の短縮形を、以前の書き言葉であるデンマーク語の語と比較すると、後半の *-ve*、*-de*、*-ge* が欠落していることが分かった。しかし、デンマーク語の表記自体も、母音間の破裂音の弱化 (*klusilsvækkelsen*) や摩擦音の弱化 (*spirantsvækkelsen*) を経ているため、現代のデンマーク語と直接比較し、結論づけることは短絡的で、一部の不適切な分類をもたらす原因となった。ここではもう一度古ノルド語形にさかのぼって比較し、前回に誤った分類や考察がなされた点を訂正したい。

デンマーク語表記と比較してブークモールでは欠落している *-ve*、*-de*、*-ge* は、古ノルド語形においてはそれぞれ *-fa* [-va]、*-ða*、*-ga* [□→] に相当する。それらはまた現代語のデンマーク語表記において大体 *-ve*、*-de*、*-ge* に相当するので、前の分類の仕方ですほど問題はないようであるが、中期デンマーク語 (約 1100 ~ 1500 年) に無声破裂音 *p*、*t*、*k* (二重子音のものは除く) は母音の後ろ、つまり語中・語末で子音の前、母音間、語末で母音の後ろという環境で弱化し、有声音 *b*、*d*、*g* になるという発達があったので、現代のデンマーク語の < -d- > と < -g- > には *-ð-* / *-g-* 起源のものと *-t-* / *-k-* 起源のものとの両方がある。つまり、前回の分類では古ノルド語形においてそのように有聲と無声とで異なった起源のものが、一緒くたに *-de*、*-ge* グループに分けられてしまった。

ブークモールにおける短縮形が当時のデンマーク語表記に左右される現象であるのなら、問題はない。しかし、短縮形で欠落している音が無声音起源である語は極端に少ないので、それは例外としか言いようがない。まず、前分類でブークモールの *la* 「～させる」は、それに相当するデンマーク語が *lade* であるために、*-de* 欠落グループに分類したが、古ノルド語形では *láta* である。この語における *t* 音の脱落は

¹ 短縮形は活用形にも現れる：bm. *sa* (*si* 「言う」の過去形) - da. *sagde* など。

Bjorvand (2000)においても不規則なものが見なされていて、助動詞として用いられるとき文中においてアクセントが付与されないため弱化したと説明されている。

それでは古ノルド語形における子音の状態が直接、短縮形に関わっているのかというと、そうとも言えない。その根拠の一つに、ブークモールの *ta*「～取る」が挙げられる。これも古ノルド語形では *taka* であるのにもかかわらず、デンマーク語表記 *tage* から *-ge* 欠落のグループに入れたのだったが、Bjorvand の解説によると、ノルウェー語とスウェーデン語において *-k-* > *-g-* の発達があり、部分的に無アクセントの位置で脱落した²、とある。この例は、つまり、古ノルド語よりは後の段階の発音状態が短縮形の形成に決定権を持っていることを示唆している。また、前の分類でこれを *-ge* 欠落のグループに入れたことは、結果的には不適切ではなかった。

中期デンマーク語ではまた摩擦音の弱化という発達が生じていて、これを考慮に入れなかったために、前研究ノートでは間違っって分類された語がある。それはブークモールの *fly* で、デンマーク語では *flyve* に相当するため、*-ve* 欠落のグループに入れてしまったが、古ノルド語形では *fljúga* であり、語根末子音は本来 *g* である³。デンマーク語の *flyve* の *-v-* は、その摩擦音の弱化の際、*-g-* [□] が後舌母音の後ろで [w] となり、表記上では < v > として表されるようになったためである。従って *fly* は *-ge* 欠落グループに分類されるべきであった。

ここでもう一度、主な動詞の短縮形を消失した子音の種類別に見てみよう：

(1) 欠落している部分が norr. *-ða* に相当するもの

bm. *be* 「頼む」

norr. *biðja*

(da. *bede*, sv. *bedja* / *be*)

by 「提供する」

bjóða

しかしここでは扱わない。

² スウェーデン語では *ta* または *taga*

³ スウェーデン語でも *g* が現れる：*flyga*。さらにニーノシュクでは *fly* と *flyge* の両方の形が認められている。

	(da. <i>byde</i> , sv. <i>bjuda</i>)
<i>kle</i> 「着る」	<i>klæða</i>
	(da. <i>klæde</i> , sv. <i>kläda</i>)
<i>la</i> 「積む」	<i>hlaða</i>
	(da. <i>lade</i> , sv. <i>ladda</i>)
<i>ri</i> 「乗る」	<i>ríða</i>
	(da. <i>ride</i> , sv. <i>rida</i>)

(2) 欠落している部分が norr. *-fa* に相当するもの

bm. <i>gi</i> 「与える」	norr. <i>gefa</i>
	(da. <i>give</i> , sv. <i>giva</i> / <i>ge</i>)
<i>ha</i> 「持つ」	<i>hafa</i>
	(da. <i>have</i> , sv. <i>hava</i> / <i>ha</i>)
<i>bli</i> 「～になる」	_____ ⁴
	(da. <i>blive</i> , sv. <i>bli</i> / <i>bliva</i>)

(3) 欠落している部分が norr. *-ga* に相当するもの

bm. <i>dra</i> 「引く」	norr. <i>draga</i>
	(da. <i>drage</i> , sv. <i>dra</i> / <i>draga</i>)
<i>si</i> 「言う」	<i>segja</i>
	(da. <i>sige</i> , sv. <i>säga</i>)
<i>ta</i> 「取る」	<i>taka</i>
	(da. <i>tage</i> , sv. <i>taga</i> / <i>ta</i>)
<i>fly</i> 「飛ぶ」	<i>fljúga</i>
	(da. <i>flyve</i> , sv. <i>flyga</i>)

語の後半が norr. *-ða* に由来する語は多く、そのためか短縮形も圧倒的に多く見つかる。一方、欠落している部分が norr. *-fa*、*-ga* に相当する上に挙げた例がほとんどである。

短縮形と非短縮形

⁴ 中期低地ドイツ語 *blîven* からの借用。

前研究ノートで言及したように、デンマーク語において後半が *-ve*、*-de*、*-ge* から成る全ての動詞が、ブークモールにおいて短縮形になっているわけではない：

(4) bm. *syde* 「沸かす」 norr. *sjóða*
 glede 「喜ばす」 *gleðja*

(5) *sove* 「眠る」 *sofa*
 rive 「裂く」 *rifa*
 love 「約束する」 *lofa*
 leve 「生きる」 *lifa*
 drive 「駆り立てる」 *drífa*

(6) *suge* 「吸う」 *súga*
 stige 「登る」 *stíga*
 duge 「役に立つ」 *duga*
 klage 「訴える」 _____⁵

ブークモールの主な動詞を調べた限りでは、norr. *-ða* 起源の語彙が多く、短縮形も豊富に見つかったわりには、非短縮形が極端に少ない。逆に norr. *-fa*、*-ga* 起源の非短縮形語は短縮形の語より多めである。

さらに短縮形と非短縮形の両方が標準形⁶として認められている語もある：

(7) bm. *la / lade* 「積む」
 ri / ride 「騎乗する」
 rá / ráde 「助言する」

また、語源は同じであるが、短縮形と非短縮形で意味が分かれ、別の

⁵ 中期低地ドイツ語 *klāgen* からの借用語。

⁶ Norsk ordbok の見出し語に基づく。ニーノシュクにおいては短縮形と非短縮形の両方の形が認められているようである (Nynorskordboka)。

語と認識されている語のペアもある：

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| (8) bm. <i>fø</i> 「養う」 | <i>føde</i> 「産む」 |
| (< norr. <i>fæða</i>) | |
| <i>la</i> 「～させる」 | <i>late</i> 「～のように見える」 |
| (< norr. <i>láta</i>) | |
| <i>li</i> 「(時が)過ぎる」 | <i>lide</i> 「苦しむ」 |
| (< norr. <i>líða</i>) | |

短縮形表記の採用

短縮形を表記上にもたらそうという考えが初めて公にされたのは、Knud Knudsen の著書、*Hvem skal vinne?* (1886 年)においてであった。彼は、書き言葉は実際の発音が反映されているべきであると主張し、当時のデンマーク語の書き言葉を少しずつノルウェーの発音にかなった形に変えていくことを提案した。後にそれをもとにして成立したのがブークモールである。その著書における正書法への提案の中で発音重視のものには、硬子音（無声破裂音）の採用、つまりデンマーク語は上述の破裂音の弱化（有声音化）を経た表記をとっているの、それが生じていないノルウェー語のほうでは無声音のままであるから、無声音として表記しようという提案、また、発音しない文字の削除⁷などがある。

ここで特に留意しておきたいのが、ノルウェー語の発音と一口にいても数多くあるバリエーションの中で、Knudsen はどれを基準とみなしたかである。彼が理想としたのは、クリスチャニア（当時のオスロ）やベルゲン、トロンハイム、トロムソなどの大都市における教養人の日常語⁸であり、彼はそれこそが「国にふさわしい」(*landsgyldig*)と考えていた。⁹つまり、一部ノルウェー語特有の発音を保っていたとはいえ、デンマークやその他の外国語の影響を強く受けたバリエーションの発音をもとにしているわけである。

⁷ 例えば、*l*や*n*の前の無音の*d*の削除（例：*falde* > *falle*、*finde* > *finne*）、*s*の前の無音の*d*、*t*の削除（例：*bedsk* > *besk*、*Pelts* > *Pels*）など。

⁸ アクセントの差はあったが方言差といえるほど違いは大きくなかった。

⁹ この理念はすでに 1876 年の *Den landsgyldige norske uttale* に著されている。

その後、短縮形は1907年の正書法の改正に正式に採り入れられ、それ以来、短縮形が表記上姿を現すことになった。またその際、短縮形を使うか非短縮形を使うかの選択は自由だった。¹⁰

消える音と環境

Torp og Vikør (1994; 241)では、1907年の正書法改正において短縮形を音韻的変更ではなく形態的変更の方に分類しているが、その発生の原因には音韻的な側面があることは否定できないと思われる。

短縮形が生じた原因としてまず考えられるのは、動詞が助動詞や機能動詞として使われ、文中において無アクセントの位置にあるために弱化や脱落が起きやすいことである。例えば(8)の、norr. *láta* は「～させる」という助動詞として用いられる場合はブークモールにおいて短縮形 *la* になり、「離れる」という普通の意味を持つ場合は非短縮形 *lata* の形で残っている。またスウェーデン語もある一定の動詞には短縮形と非短縮形の両方があるが、確かに短縮形を持ちうるのは *be*「頼む」や *ta*「取る」、*ge*「与える」、*ha*「持つ」、*bli*「～になる」などのごく基本的な動詞に限られている。

しかし、ブークモールにおける動詞の短縮形の出現範囲はスウェーデン語のそれより明らかに広い。例えば *bla*「めくる」や *smi*「鍛える」などのような、それ自体の意味が失われて機能化しえないような動詞も多く短縮形になっている。さらに、消失する子音が、古ノルド語 *-ð*、*-f*、*-g* 起源の *-v*、*-d*、*-g* に限られているのだから、無アクセント位置における弱化からだけではブークモールの短縮形を説明することはできない。それらの子音はある一定の環境において他の子音よりも消えやすい性質を持っていることが前提条件であるはずだ。

Knudsen が基準とみなした当時の教養人の発音において、すでにそれらの子音は消えかかっていたと思われる。先に述べたように、中期デンマーク語で母音後の *-v*、*-d* [-*λ*-]、*-g* [-*ŋ*-] は弱化し、半母音になっ

¹⁰ 短縮形は動詞だけではなく、*far*/*fader*、*mor*/*moder*、*bror*/*broder*(選択可能)などの若干の名詞も含まれる。また *fjær* (< *fjæder*)、*fôr* (< *foder*)への変更は義務的。

たり脱落して¹¹、それがノルウェーの教養人たちの発音に影響していた可能性がある。恐らく、母音間で調音器官同士の狭めがなくなってそれらの子音は半母音になり、それを経てさらに脱落したと思われる。

中高ドイツ語の縮約との類似点・相違点

中高ドイツ語(以下 mhd.)に縮約(Kontraktion)という、短縮形と非常によく似た現象があるが、その発生についてはどのように解釈されているのだろうか?この場合においては母音間で有声閉鎖音 *b*, *d*, *g* が消失する:

- i) *-igi-* > *-î-*、*-egi-* > *-ei-*
(例: ahd.¹² *ligit* > mhd. *lît*, ahd. *legit* > mhd. *leit*)¹³
- ii) *-ibi-*、*-idi-* > *-î-*; *-abe-*、*-ade-* > *-â-*
(例: *gēben*「与える」に対して *gît* や *gîst*, *quēden*「言う」に対して *quît*;¹⁴ *haben* > *hân*, *Hadewart*(固有名詞) > *Hâwart*)

Paul (1982; 102-4)はこの現象について、*g*の消失は軟口蓋音化によるもので、残りの *b*, *d*は一般的に軟口蓋音化しないから、それらの音の消失は無アクセント形と関係があるだろうと説明している。しかし、それではなぜ *b*, *d*は消失して他の種類の子音は同じ位置にあっても消失しないのかについては言及されていない。

さらにこの縮約現象で注目したいのは、子音が消失した後も長母音ないしは二重母音でもって重さが保たれていることである。つまり、少なくとも語の後半が単に省略されたのではないということである。しかしながら、ブークモールの短縮形においては、消失した分母音が長くなったり、後半の母音が残ったりはしていない。ブークモールの短縮形が動詞に偏って多いことを考慮に入れると、中間の子音がすでに弱化した屈

¹¹ <-d->も半母音で発音されたり、消失したりしたが書き言葉に多くそのまま残され、現代デンマーク語では[-ɲ-]の発音が復旧している。

¹² 古ドイツ語の略。

¹³ *ligit* は *liggen*「横たわる」の、*legit* は *leggen*「横たえる」の3人称単数直説法現在。

¹⁴ *gît*, *quît* は3人称の *gîst* は2人称の単数直説法現在

折形（現在形 $-er$ など）から語幹を再建したために不定形に $-e$ が残らなかったとも考えられる。例えば *haver* [h□□□.] > [h□□□.] から屈折語尾 $-er$ を取り除いて不定形を作ろうとすれば、*ha* [h□□]の部分のみが残るといった具合である。

また Paul が、音韻的に一つのグループを成す三つの消失子音に対して、軟口蓋音化と無アクセント位置による脱落という別々の解釈を与えたように、ブークモールの短縮形の場合もかの三つの子音が同じ要因から等しく消失したとは考えにくい。なぜなら、短縮形と非短縮形について述べたとおり、norr. $-ða$ 起源の語は残りの二種類語群より短縮形を持つ割合が大きいからである。それを考慮に入れると、少なくとも、これまでの考察で挙げてきた二つの要因、無アクセント位置による脱落と半母音化の関わり方は一様ではないと言えるだろう。

以上のようにブークモールの動詞の短縮形が生じた経緯を表記面と音韻面から考察してきたが、中高ドイツ語の縮約を含めて、その現象で消えた子音の性質、消えやすさについては、ここでは追究しない。というのも、今までの考察から推測すると、消えやすさは母音的になりやすさ、とも言い換えられそうだが、問題の子音は、ソノリティで測ると、確かに無声破裂音や無声摩擦音より子音度が低いけれど、消失が生じなかった流音・鼻音はそれらよりもさらに子音度が低い、すなわち母音に近い、という矛盾が生じてしまう。つまりソノリティ以外の別の要因、例えば口腔内における閉鎖などを考慮に入れなくてはならないなど、問題が大きくなるので、それについてはテーマを改めて取り上げたい。

< 参考文献 >

- Bjorvand, Harald og Fredrik Otto Lindeman (2000): *Våre arveord. Etymologisk ordbok.* (Oslo: Novus)
- Cramer, Jens og Peter Kirkegaard (2000²): *Dansk sproglære for nordmænd.* (Oslo; Gyldendal)
- Guttu, Tor (red.) (1998): *Norsk ordbok.* (Oslo: Kunnskapsforlaget)
- Hovdenak, Marit (o.a.) (red.) (2001³): *Nynorskordboka.* (Oslo: Det Norske Samlaget)

- Jahr, Ernst Håkon (1989): *Utsyn over Norsk språkhistorie etter 1814*. (Oslo: Novus)
- Karker, Allan (1993): Sproghistorisk oversikt. I: (*Politikens Nudansk ordbog*, 69-87. (København: Politikens Forlag)
- Mårtenson, Per og Anton Fjeldstad (1999³): *Svenska för norrmän*. (Oslo: Gyldendal)
- Paul, Herman (1982²²): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. (Tübingen: Max Niemeyer)
- Torp, Arne og Lars S. Vikør (1994²): *Hovuddrag i norsk språkhistorie*. (Oslo: Gyldendal)

(くぼ さやか)

KUBO, Sayaka: Kortformer i verb i bokmål.